

B-21 多発肺癌に対する外科治療

愛知県がんセンター胸部外科

○陶山元一, 波戸岡俊三, 福井高幸, 川崎徳仁, 篠田雅幸, 光富徹哉

【目的】肺癌外科治療において、初回治療時に複数の癌を認めたり、あるいは第1癌治療後に新たな肺癌を認めることは稀ではなくなった。今回、これらのうち多発癌と考えられる症例を中心に、外科治療について検討した。

【対象】本年2月までに切除した肺癌1647例のうち多発癌と診断した41例(3%)を対象とした。

【結果】多発癌41例のうち同時性は19例(46%)で2例(11%)は1病巣のみ切除したが、他の17例(89%)は両病巣とも切除した。異時性は22例(54%)で、再切除を行った例は6例(27%)であった。同時性多発癌の術式は葉切除11例(65%)、全摘1例(6%)、部分切除2例(12%)、両側葉切除1例(6%)、葉切除+部分切除2例(12%)であった。異時性多発癌の第2癌の術式は葉切除3例(50%)、区域切除・部分切除が3例(50%)であった。少なくとも一方が肺門部早期肺癌であった例は、同時性多発癌19例のうち5例(26%)、異時性多発癌22例のうち4例(18%)であった。初回手術後の外科治療成績は5年生存率が同時性多発癌は54%(n=17)、異時性多発癌は86.4%(n=22)であった。異時性多発癌の第2癌手術後の5年生存率は60%(n=6)であった。

【まとめ】(1)異時性多発癌が同時性多発癌より多かった。(2)同時性多発癌は両病巣とも切除できる割合が多かったが、異時性多発癌では第2病巣を切除できない割合が多かった。(3)同時性、異時性多発癌は、ともにどちらかの病巣が肺門部早期肺癌である割合が多かった。(4)異時性多発癌のうち、第2癌の外科治療が行えた例の治療成績は良好であった

B-23 切除不能Ⅲ期非小細胞肺癌(NSCLC)に対する抗腫瘍効果の個人差を考慮に入れた個別化放射線・化学療法の検討

新潟県立がんセンター内科¹⁾, 同 放射線科²⁾○牧野真人¹⁾, 塚田裕子¹⁾, 新保俊光¹⁾, 横山 晶¹⁾, 栗田雄三¹⁾, 斎藤真理²⁾

【背景】放射線・化学療法はPS良好な切除不能Ⅲ期NSCLC症例に対する標準的治療であるが、導入化学療法(IC)における個々の症例の効果は個人差が大きい。ICでの腫瘍縮小率に基づいて放射線併用時期を調整し治療全体としてのintensity増強をめざした個別化放射線・化学療法の第Ⅱ相試験を計画した。【目的】ICでの腫瘍縮小率に基づく個別化放射線・化学療法における奏効率と生存期間、毒性の検討。【対象と方法】切除不能Ⅲ期NSCLC初回治療例の内、根治照射可能、70歳以下、PS=0-1で十分な臓器機能を有する症例。ICとしてCDDP(80mg/m²,day1)+VDS(3mg/m²)+MMC(8mg/m²)併用療法(MVP)を実施。1コースのICでMR/PRの症例は2コースのIC後、NC/PD症例はIC1コース後に低用量CBDCA(25mg/m²,daily)併用(第1,2,4,5週)の胸部放射線療法(60Gy/30f)を実施。【結果】1996/11-1999/12に29例が登録された。年齢は45-70歳、中央値64歳。男性26例、女性3例。組織型は扁平上皮癌19、腺癌10例。臨床病期はⅢA13、ⅢB16例。7例が現在治療中で、22例が予定された治療を終了。ICは9例で1コース、13例は2コース実施。現時点で評価可能な20例中PRが12例(60%)、生存期間中央値が14ヶ月、1年生存率が56%である。NCI-CTCのGrade3/4の好中球減少はICでは55%に、放射線療法で16%に認めた。Grade3/4の血小板減少は各々9%、11%に認められた。食道炎はGrade1が15例、Grade2が4例、Grade3/4はなし。ステロイドを要する放射線肺炎が6例観察された。MVPを用いた個別化放射線・化学療法では肺毒性の増強が問題である。今後、新規抗癌剤を含んだ化学療法と放射線の併用における慎重な検討が必要と考えられる。

B-22 原発性肺癌肺切除後の第2原発性肺癌および肺癌肺転移に対する手術術式の検討

結核予防会複十字病院呼吸器外科

○中島由槻, 白石裕治, 高砂敬一郎, 葛城直哉, 吉田聡子

【目的】第2原発性肺癌と肺癌肺転移に対する術式について検討した。

【対象】対象は1975~1999年に当院呼吸器外科で区域切除術以上の肺切除術が施行された肺癌症例のうち、その後第2肺癌(以後原発)または肺癌肺内転移(以後pm)に対し、肺の再切除または再々切除を行った41例である。【結果】41例のうち、経過、画像所見、組織所見等で原発と判定されたものが21例、pmと判定されたものが20例であった。原発例のうち7例は第1癌と同時期に発見されており、その組み合わせはAd-Ad2例、Sq-Sq2例、Ad-Sq2例、Carcinoid-Carcinoid1例。異時癌は14例でAd-Ad10例、Sq-Sq3例、Sq-SmCC1例であった。Pm20例は全て異時発生で、Ad18例、Sq2例であった。これらに対する術式は、原発例では第1癌は全て1葉切であり、第2癌に対して同時癌では同側葉切(右中→右下同時切)1、同側全切2(同時切1、異時切1)、葉切・区切4(全例異時対側切)、異時癌では葉切後同側葉切(右下→右中切)2、葉切後全切2(右1、左1)、葉切後対側葉切6、葉切後区切4(同側2、対側2)。Pm例では葉切後同側葉切2(右)、葉切後全切3(右1、左2)、葉切後対側葉切2(左右各1)、葉切後同側区切6、葉切後対側区切4、葉切後同側部切1、区切後同側部切1。予後は原発例は癌死6例、pm例では癌死7例、担癌生存4例であった。【結語】①原発例では第1癌と同じ組織型が85%を占めた。②原発例では葉切後の第2癌に対する術式は62%が葉切以上であった。特に異時切除では約70%に根治性を考慮した葉切以上が施行されていた。③pm例では葉切以上は35%で、65%では縮小切除が考慮されていた。④予後は原発例の方が良好であった。

B-24 非小細胞肺癌に対する Induction chemotherapy の効果

長崎大学医学部第1外科¹⁾, 同属病院 病理部²⁾○村岡昌司¹⁾, 岡 忠之¹⁾, 赤嶺晋治¹⁾, 永安 武¹⁾, 山吉隆友¹⁾, 林徳眞吉²⁾, 綾部公懿¹⁾

【目的】非小細胞肺癌に対する Induction chemotherapy (以下ICT)の効果について retrospective に検討する。【対象】対象は1990年1月より2000年3月までに経験したICT後の非小細胞肺癌切除症例21例。組織型は扁平上皮癌10例、腺癌9例、大細胞癌2例で、ICTの適応理由は局所進展(C-T3,T4)11例、縦隔リンパ節転移9例(C-N2,N3)などであった。regimenは(M)VP10例、CDDP+VP16が5例、CPT11+CBDCA2例、CDDP+VNB+MMC4例で、各々1~4コース施行された。【結果】ICTの効果判定はCR1例、PR13例、NC6例、PD1例であった。術式は肺葉切除14例、2葉切除2例、一側肺全摘3例、区域・部分切除2例であった。術中に肺動脈の剥離困難症例が4例あり、1例は血管損傷を来した。術後病期は0期1例、IA期2例、IB期1例、IIA期1例、IIB期2例、IIIA期6例、IIIB期7例、IV期1例であった。ICT前の臨床病期と比較しDown stageが認められた症例は10例(47.6%)であった。術後の呼吸器合併症は12例(57.1%)で、喀痰排出障害5例、ARDS2例、気管支瘻・呼吸不全各1例などで、3例(13.6%)が術死となった。術死を除いた5年生存率は32.7%で、局所進展でICTが行われた症例(5生率50%)の方がリンパ節転移症例(5生率なし)より予後が良好であった。C-T3,T4に対してVP療法が行われた2例が長期生存中である。【結語】非小細胞肺癌に対するICTは約半数で施行前臨床病期よりDown stageさせる効果があり、特に局所進展に施行された症例では長期生存の得られるものもあった。術後合併症がやや高率で、術後管理に十分な注意が必要である。C-N2症例に対する治療が今後の課題である。